

岡本太郎の「伝統論」に関する一考察

志 賀 祐 紀

お茶の水女子大学 人文科学研究
第9巻(2013)別刷

岡本太郎の「伝統論」に関する一考察

志賀 祐 紀

はじめに

岡本太郎は、1946（昭和21）年に復員すると、ほどなくして活動を再開し⁽¹⁾、戦後の日本にふさわしい芸術は前衛芸術であると積極的に主張した。そこでは、当時の日本で前衛芸術が理解されていないのは時代遅れであると述べ、その原因は敗戦前の日本の過去と既成勢力にある、それらを打破すべきと激しく糾弾し続けた⁽²⁾。また、芸術のみにとどまらず、例えばダンス⁽³⁾、映画⁽⁴⁾、大学⁽⁵⁾など、多岐にわたる事柄について、戦前のフランス滞在経験⁽⁶⁾で得た見識からフランスの事例を、戦後の新しい時代に必要な「先進国」の見習うべきモデルとして、様々な雑誌や新聞紙上で紹介した。そのような岡本の革新的な発言は、敗戦直後の日本において多くの人々の注目と期待を集めた⁽⁷⁾。

当時、岡本は前衛芸術を主張する自身の立場を次のように説明している。

いわゆるアヴァンギャルドとはフランス語で前衛の意味であつて今から三十年程前ヨーロッパにおこつた超モダンな先駆的仕事をさしてよんだものである。(中略)そしてそれが世界的に芸術の主力となつている。であるから今以前衛と称するのは少々おかしいのであるが、我国の画壇ではアヴァンギャルド芸術はつい最近まで全く異端視され蔑視され、新しい精神も作品もほとんど皆無に近い状態で今日我々が世界の水準に同調せんがため過去の時代遅れの画派に反抗して躍起する時、敢えて「前衛」を自称する次第なのである⁽⁸⁾。

筆者はこの発言に着目し、拙稿「岡本太郎の「前衛」—『岡本太郎関連記事 1949 No.1』から—」（『米沢史学』第27号、米沢史学会、2011年10月）において、次のように指摘した。

前衛芸術は既に「世界的に芸術の主力となつている」にもかかわらず、「今以前衛と称するのは少々おかしい」と違和を岡本は感じている。「前衛が主流である」矛盾をよく認識していたといえよう。よって、自らが真の「前衛」であるために、「既に世界の主流である前衛芸術」を「日本では未だ理解されていない」とし、その原因である日本の過去や既成勢力を激しく否定することにより、日本に限定した「前衛」を成立させようとしたのである。このように岡本は、真の「前衛」であることに強いこだわりを見せている。

ところが、1950年代に入ると岡本は、尾形光琳の芸術⁽⁹⁾、縄文土器⁽¹⁰⁾、中世の庭園⁽¹¹⁾など、日本の過去のモノ、特に古美術に着目し、「伝統」に関する論考を次々と発表するようになる。そして、1956（昭和31）年、それらの論考を再録し光文社より刊行された書籍『日本の伝統』⁽¹²⁾は、当時のベストセラーとなった⁽¹³⁾。このように、日本の過去のモノ、「伝統」を論ずる岡本は、それ以前に日本の過去を否定し革新を声高に主張していた時と同じように、大きく注目を集め支持された。

筆者はこの事象にいくつかの疑問を感じる。日本の過去を否定し、真の「前衛」であることにこだわる岡本が、積極的に日本の過去のモノに着目し「伝統」を論じること、そこに矛盾はないのだろうか。また、

矛盾がないのだとしたら、真の「前衛」としてどのように「伝統」を論じたのであろう。さらに、岡本の「伝統論」の何が当時の人々に支持されたのか。

ところで、岡本の「伝統論」については、美術史や民俗学の視点から既に検証がなされている。榎木野衣や赤坂憲雄は、岡本がフランス滞在時に培った哲学や民族学などの確かな学識を背景に、「伝統」を論じていることを指摘している⁽¹⁴⁾。また、例えば、岡本が「縄文を発見した」⁽¹⁵⁾として「縄文土器論」が今日でもよく知られているが、日本の過去のモノについて、それまでとは全く異なる、つまり革新的な捉え方や見方を提示した意義を言及している⁽¹⁶⁾。

しかし、管見の限りでは先行研究において、筆者が抱いた疑問に対し回答となりうる言及を見出すことができない。そこで本稿では、筆者の視点により改めて岡本の「伝統論」を考察する。敗戦後の日本において、日本の過去を否定し支持を集めていた岡本が、1950年代に入ると、今度は日本の過去のモノに着目し、「伝統」を論じ、再び支持を集める。この事象を検討することにより、岡本の「伝統論」の背景を明らかにし、さらに戦後の日本の思想について新たな事柄を指摘することを目指したい。

第1章 岡本太郎の「伝統論」

真の「前衛」であることにこだわる岡本は、日本の過去のモノ、「伝統」についてどのように論じたのだろうか。本章では、1955（昭和30）年に、岡本が『中央公論』に寄稿した「伝統序説」⁽¹⁷⁾を中心に検討を行う。「序説」と題名にあるように、彼が「伝統」を論ずる上での前提がそこでは述べられている。

第1節 真の「前衛」として論じる「伝統」

まず、「伝統」の概念について、岡本が何を言及しているのか見てみよう。

もちろん、伝統はわれわれの血液であり、骨格です。それが本当に今日生きるわれわれのよろこびであり、日々の原動力であるならばすばらしいと思います。

だが、事実は――一般に考えられている「伝統」は残念ながらまったく正反対です。

今日、新鮮な世代が伝統だとか、古典などと聞くと、正直にいつて奇妙に威だけ高く、ペダンチックでややこしい。暗く、おもく、はげたり、しめつたり、沢庵石のように陰気です。

多分、うんと勉強して教養をつかみ、ゾーケイを深くしたならば、あるいはそうでなくなるかもしれない。が、それだけの努力をする気も、実力もないとすれば――やはりどうも縁がない⁽¹⁸⁾。

このように、「教養をつかみ、ゾーケイを深くし」なければ理解できないという「伝統」に対する既成概念を否定している。さらに、「本来」、つまり真の「伝統」とは「今日生きるわれわれのよろこびであり、日々の原動力である」べきと、新たな概念を提示している。そして、次のように続けている。

もちろん、古典自体がそのような性格を持つていないわけではない。

伝統主義者が一手販売にして、一般をおどしつけているからです。彼らの趣味的な陶醉と、深刻そうに、観念的に感心してみせる、あの思わせぶりのポーズが、あたかも日本古典の性格そのものであるかのように誤解されているのです⁽¹⁹⁾。

「伝統主義者」によって、「伝統」が「一般」には理解出来ないものであるかのように「誤解」されると批判している。もちろん、ここでいう「伝統主義者」とは、岡本が主張しようとしている真の「伝統」を主義とする者ではない。

また、当時「日本の伝統」とされていたものについては、次のようなことを述べている。

不幸なことに中世文化の積極性は徳川三百年の閉された封建世界において次第にゆがめられ、抑えつけられてしまった。芸術家の強靱な、逆説的な自己主張であつた方法もようやく形式となり、観念化されてくるのです。そして素町人的、エゴイスティックな、現実逃避の雰囲気になりかえられて行きます。

すべて人間の表側よりも裏側だけに神経を集中し、強烈な生命力の奔出よりも繊細なひねりを「通^{つう}」とする。芸術は洒落や味や型の世界に墮落して行きます。

だがこのような消極的な裏側文化の面だけに「日本の伝統」という決定的なレッテルをはつてしまつたのは、明治時代のようなです。(中略)

陽性でこつてりした西洋文化に対して、陰性でしぶい、裏側^{ネガティブ}の文化をおしたた。彼の実証的で明快な近代性に対して、観念的な精神主義と形式の継承がものものしい日本文化の名において行われたのです。(中略)

われわれはこのような、西洋文化へのコンプレックスとして急ごしらえされた、いわば影のようなつくりものを信じることは出来ません⁽²⁰⁾。

当時「日本の伝統」とされていたものは、江戸時代の「封建世界」に端を発する「消極的な裏側文化」であり、明治時代にそれが「日本の伝統」であると「レッテル」を貼つたものにすぎず、「信じる」必要はないのだという。「裏側文化の面だけ」と記しているが、日本の過去には他の文化も存在すること、そして新たに「日本の伝統」を捉え直す可能性を示しているといえよう。

では、そのように「伝統」に対する既存概念、そして当時「日本の伝統」とされていたものを否定してしまうのならば、どのようにして何を「伝統」として捉えたらよいのだろうか。次のように岡本は論じている。

過去の遺産が結構だといつても、それは私がいまそう思い、今日現代的にその価値を認め、それを生かすからに他ならない。その情熱と、実力によつて過去が支えられるのです。だからむしろひたすらこちらにかかわっていることです。(中略)

伝統は自分にかかつている。おれによつて生かし得るんだ、といいはなち、新しい価値を現在に創り上げる。伝統はそういうものによつてのみ遅く継承されるのです。形式ではない。受けつがれるのは生命力であり、その業^{ごう}です⁽²¹⁾。

「伝統」は「現在」の人々が主体的に「価値」を認め生かすもの、その「新しい価値」を創造するものだ。過去の人々が認め、創造した価値（既存の評価）により、「伝統」を捉えるのではないというのだ。しかし、既存の評価によらずして、どう「価値」を認めればよいのであろうか。それについて、次のように岡本は言っている。

素人こそ本当の批評眼を持つているはずです。玄人はいろんなことを知つています。約束ごと、イワク因縁、故事来歴。そんなものを知つていればいるほど、彼らはそれにひつかり、本質にふれなくなる。(中略)

このように直接的な素人の眼が、いつでも新しい現代的な芸術として伝統を今日に生きかえらせる根本条件です。(中略)

たとえ戦後派に伝統芸術に対する教養が皆無でも、もしじかに芸術としてそれにふれたならば、やがて自分自身に気がつかなかつた情熱が、かえつて考証・知識に邪魔されないだけ無条件に上つてくるでしょう。それがわれわれの正しい伝統であるならば――⁽²²⁾。

「約束ごと、イワク因縁、故事来歴」（既存の評価）に影響されない、「直接的な素人の眼」、つまり「現在」の人々の感覚のみにより捉えるべきだと主張している。既存の評価を知らなくても、「現在」の人々の感

覚に訴えてくるもの、それが「現在」における真の「伝統」だというのである。

しかしながら、真に「前衛」として既存の知識や既成概念を打破し、新たに創造していこうとするのなら、過去のモノなど全て無視して、「現在」から全く新しいモノを創り上げることに努めればよいのではないだろうか。このことについて岡本は、次のように説明している。

すべての古典はそれぞれの時代に、あらゆる抵抗に対して現在を決意し、逞しい生命力を充実させた精神の成果です。過去の権威によりかからず、己を卑下せず、激しく生ききつた気配にあふれています。そういうものだけが伝統として、精神的に、肉体的に、われわれ現在を決意したものにびりびり伝つてくるのです⁽²³⁾。

「古典」は、その時代の人々がそれぞれの「現在」を決意し、「過去」によらずに主体的に新しく創造したモノだという。要するに、「古典」をその時代にとって前衛的なモノと位置づけているのである。そしてそのようなものが「伝統」として、「われわれ現在を決意したもの」、つまり「過去」によらずに主体的に、前衛的に創造しようとする「現在」の人々の感覚に訴えてくるというのだ。このように、「古典」は過去のモノではあるが、真の「前衛」が価値を認めることができるモノとして論じている。さらに、「古典」をその時代の前衛的なモノと位置付けることにより、主体的に前衛的に創造していた日本の過去が存在していた、つまり日本の過去に「前衛」が既に成立していたと論じることを得ているといえるのではないだろうか。

そして、そのように前衛的なモノである「古典」は、「激しく生ききつた気配にあふれて」いるという。先に見たように、「伝統」からは「形式」ではなく「生命力であり、その業^{わざ}」を継承すると岡本は述べている。その「激しく生ききつた気配にあふれ」た「生命力であり、その業^{わざ}」を継承して、また新たに「現在」を決意し、「過去」によらずに再び「新しい価値」を創造していくというのである。そうであるならば、岡本が述べたように、「伝統」とは「われわれの血液であり、骨格」であり、「今日生きるわれわれのよろこびであり、日々の原動力」、いわば「現在の糧」となるといえるだろう。このように岡本は、「伝統主義者」とは異なる立場で、「現在」を決意する者、つまり「前衛」にとって価値あるモノとして日本の過去のモノ、「伝統」を論じ得ている。

以上のように、岡本は真の「前衛」として「伝統」を論じることに挑んでいる。そこでは、「伝統」に対する既成概念、そして当時「日本の伝統」とされていたものを否定し、新たにそれらを捉え直すべきと主張している。それにより、岡本は「伝統」を真の「前衛」として取り組むべき課題となし得ている。それだけではなく、既存の評価によらずに「現在」の人々が自らの感覚で主体的に「伝統」を捉えるべきと、前衛的な捉え方を提示している。さらに、本来は真の「前衛」として打破すべき過去のモノである「古典」を、その時代の前衛的なモノと位置づけ、その「生命力であり、その業^{わざ}」を継承し、また「新しい価値」を創造することができるのだと説くことにより、「現在」においても、「前衛」であろうとする者にとっても、価値のあるものとして位置付けている。

このように岡本は、真の「前衛」であることと矛盾をせずに「伝統」を論じることに成功している。そして、このような前衛的な「伝統論」を展開することにより、岡本は過去に着目しながらも、真の「前衛」としての立場を貫いたのである。

第2節 岡本が創造しようとした「伝統」

真の「前衛」であることと矛盾しない「伝統論」を成立させ、岡本はどのような「伝統」を創造しようとしたのであろうか。本節では、そのことについて検討を行う。まず、次の岡本の発言に注目したい。

私は古代のおおらかで激しくて、そして無邪気な表側文化を、封建時代以来の裏側文化にくらべて、どつちがどうといっているのではない。ともにわれわれの過去です。まず捉われない率直な眼で、単純素朴に、しかし激しく、徹底的にそれらを見直し、同時に、われわれ自身の現在をも直視しなければならない。繰り返していいますが、現在を正しく捉えることが第一条件です⁽²⁴⁾。

先述のとおり、岡本は「封建時代以来の裏側文化」だけが、当時「日本の伝統」とされていることを否定し、新たに捉え直す必要性を主張していた。ここでは、そのためには「われわれ自身の現在」を「正しく捉えることが第一条件」、つまり「現在」の「現実」をありのままに認識することが重要だと強調している。そして、認識しなければならない「現在」の「現実」について、次のように言及している。

われわれはすでに世界の現代史の上にあります。現代芸術も自然科学も、もちろん伝統は現代の要請を離れてはあり得ない。われわれが今日現実において果すべき課題によつてこそ受けつがれ、したがつてのり越えるべき過去の座標も定めてくるのです⁽²⁵⁾。

認識しなければならない当時の「現在」の「現実」とは、日本が「すでに世界の現代史の上」にあるということだという。そして、「現実」を認識することによって、「過去の座標」、つまり何を「伝統」として捉えるのか定まってくると述べている。では、「すでに世界の現代史の上」にあるとはどういうことか。このことについては、1964（昭和39）年、『日本の伝統』が角川文庫から再刊行された際に、新たに加えられた章「伝統論の新しい展開」において、次のように岡本が補足し説明している。

むしろわれわれは、近代文化を生んだ西欧によって育てられている。洋服を着て、電車に乗って暮している事実だってそうだし、ものを喋るにしても、その論理のたて方、もののつかまえ方、すべてがそうです。子供の時から教育され、身にそなわった西欧近代的なシステムによって、われわれは判断し、生活し、世界観を組み立てているのです。

私は別だんそれが正しいとか、また逆にゆがんでいるとかいっているのではありません。ただ、それが事実だと言うこと。つまりとかく大層らしく言われるほど、われわれは純血な伝統を負っているのではないということを正視してほしいのです。（中略）

それは何も日本の過去にあったものだけにはかかわらない、と考えた方が現実的ではないか。なにもケチケチ狭く自分の承けつぐべき遺産を限定する必要はありません⁽²⁶⁾。

日本が「すでに世界の現代史の上」にあるという「現実」とは、もはや日本だけの「純血な伝統を負っているのではない」ということである。当時の日本は、既に「西欧近代的なシステム」の下に成り立っている。よって、日本だけではなく、「西欧近代的なシステム」を生んだ西洋の伝統も負っていることを、「現実」として「正視」しなければならないというのだ。さらに言うと、そのような「西欧近代的なシステム」の下に生活しながらも、日本の過去のみ、ましてや「封建時代以来の裏側文化」だけを「日本の伝統」として捉えるのは、「現在」の「現実」を「正視」していないということになる。では、その「現実」を認めてどうせよというのだろうか。「伝統序説」の最後で、次のように岡本は強く訴えている。

われわれは今、過去の日本と同時に西洋の伝統をも、ともどもひきうけ、そして克服して行かなければならないのです。歴史上の高度な文化がそれぞれになわされた、運命です。それにうちかつたものが、新しい、巨大な文化の伝統をひらくのです。

人間としてぶつかり、掴みとり、喰えるものはすべて、われわれの餌とすべきです。そして、遅しく全的に生きる情熱こそ、新しい伝統のあかしとなるだろう。徹底的に闘い、傷跡を地上にふかくえぐり、塗りこめ、それが風に耐え、電撃と暴風と、苛烈な太陽の直射にたえて、生きぬくことによつて、人間の伝統を貫いて行くのです⁽²⁷⁾。

日本と同様に西洋の「伝統」を、「われわれ」のものとして「ひきうけ、そして克服して行かなければならない」と主張している。「喰えるものはすべて、われわれの餌とすべき」と述べているように、日本の過去からだけではなく、西洋の過去からも「現在」の人々の感覚に訴えてくるものを「伝統」として捉え、「新しい価値」を創造すべきだという。そのようにして創造される「新しい伝統」は、当時「日本の伝統」とされてきたものとはもちろん異なるであろう。さらに、「新しい、巨大な文化の伝統」がひらくと述べているように、その「新しい伝統」の展望を希望的に明るく示している。

また、1956（昭和31）年9月発行の『日本の伝統』初版の「はじめに」で、岡本は次のようなことを述べている。

近ごろ世の中が奇妙にチンマリと落ちついてきました。新しいものにぶつかって前進してゆくというよりも、一種の無気力さから、すべてが後もどりにしているのではないか、という感じです。そんな風潮に乗って、古い文化への関心が高まっているようです。

だが、それはかならずしも、よろこぶべきことじゃない。逆コースという、なにも生みださない不毛なラインを下降しているからです。ふたたび、あの暗い、しめっぽい日本にもどってしまうのではかない。

こういう時期にこそ、正しい伝統への心がまえ、考えかたをはっきりさせておかなければならない。まさに緊急な課題です⁽²⁸⁾。

本稿の冒頭でも述べたように、復員し活動を再開した頃から岡本は、敗戦前の日本の過去や既存勢力を打破して革新すべきと発言を繰り返し、多くの人々の注目と期待を集めていた。ところが、敗戦後からおよそ10年を経た日本は落ち着き、革新すべき機運よりも、日本の古い文化への関心が高まって来ているのだという⁽²⁹⁾。「ふたたび、あの暗い、しめっぽい日本にもどってしまうのでは」、つまり再び戦前の日本社会のようになってしまうのではと、岡本は危惧している。そのような「現在」の「現実」を認め、そのような「現実」に、真の「前衛」として対抗するために、岡本は「伝統」を論じると自らの立場を表している。そして、「新しい伝統」の創造を主張したのである。

ところで、やはりここでも、当時「日本の伝統」とされてきたものを否定しながらも、同時に戦後の社会において日本の過去のモノや「伝統」を価値あるものとして位置付けることに、岡本は成功しているといえるのではないだろうか。なぜなら、日本の過去だけではなく西洋の伝統を負っている「現実」を認識すべきと主張しているが、依然として日本の伝統を負っていることには変わりはない。つまり、西洋の伝統だけに着目してしまい、日本の伝統を全て否定してしまうのは、「現在」の「現実」を見誤っていることになってしまう。さらに、第1節で確認したように、「現在」の「現実」を認識し、既存の評価によらず「現在」の人々が自らの感覚で主体的に捉えるという前衛的な手法を用いれば、日本の過去のモノを新たに「日本の伝統」とすることが可能となるからである。

第2章 岡本太郎の「伝統論」に対する反響

岡本の「伝統論」に対しては、発表当時、どのような反響があり、そしていかに受け止められたのだろうか。

1955（昭和30）年、岡本が『中央公論』12月号に「伝統序説」を発表すると、新聞や雑誌に次々と評が掲載され、話題となった。また、「はじめに」で述べたように、翌年、「伝統序説」をはじめとした岡本の複数の「伝統論」を再録し刊行された『日本の伝統』は、ベストセラーとなり大きく注目を集めた。本

章では、これら岡本の「伝統論」に対する当時の評を中心に検討を行う。

まず、1956（昭和31）年9月の『日本の伝統』刊行直後に、『東京中日新聞』に掲載された書評を見よう。

著者は先に「今日の芸術」を書いて現代の芸術作品における既成の権威というものを痛烈にやっつけて反響を呼んだが、この「日本の伝統」では日本の過去の芸術に関する職業批評家たちの盲目的な伝統崇拜を痛快にやっつけている。（中略）著者は革新的な純粋にシロウトとしての目で日本の古美術を見直し、歯切れのよい調子で再評価をやっているが、日本の古美術のすべてを否定しているわけではない。著者がとくに推賞しているのは、まず縄文式土器の荒々しい紋様の迫力、光琳の大胆な構成、それに中世の庭のアブストラク的な構図などでとくに銀閣の方丈の前に砂を盛り上げた巨大な銀沙灘には感嘆の声を惜しまない⁽³⁰⁾。

そして同時期に、『サンデー毎日』の評には、次のようなことが記されている。

伝統破壊のカコフォニーを勇ましく吹き鳴らす岡本太郎が、これこそ自分の背負った伝統だと怒鳴っているのが、この本だ。（中略）とにかく亀井勝一郎だの、竹山道雄だのといういま流行の古美術解説者が、マクラを並べてなぎ倒されているのは、まことに見もので、戦後とみに浮わつた古美術流行の波が高まっている世間の眼を、落ちつかせるいい薬になるだろう⁽³¹⁾。

「伝統序説」及び『日本の伝統』に対する評の多くが、以上のような調子であり、岡本の「伝統主義者」に対する痛烈な批判や「古典」に対する従来の見方の否定が特に着目され、支持されている。しかしながら、「現在」の「現実」を認識し、「現在」の人々が自らの感覚で主体的に「伝統」を捉え、「新しい価値」を創造しようという、岡本の主張の主軸ともいえる部分についてはあまり注目されていない。

さらに、もう少し他の評も見てみよう。もちろん、岡本に対する批判も複数あった。そこではどうであろうか。以下は『日本の伝統』に対し、『産業経済新聞』に掲載された否定的な評である。

ここではあくまでも過去を絶ちきって、今日の芸術として過去の芸術を批判し、過去の中から今日の価値を創造するというまだ批評家も、美術史家も試みなかった新しい方法論が展開されている。しかし、こうした方法論は、批評家ではなく、科学者としての立場に立つ美術史家には受け容れることはできないであろう。それは画家であり（二科会）モダンアートのチャンピオンである著者自身の対決であって、その意味では、極めて激しい、興味深い、教示的な内容をもってはいるが、学問としての普遍妥当性となると、問題は別である⁽³²⁾。

過去、つまり既成概念を打破しようとしたことは理解されている。しかし、「過去の中から今日の価値を創造する」という主張については、「新しい方法論」として少し触れられてはいるものの、それは「自身の対決」、つまり創造的な画家の独特の主張と見なされてしまっている。さらには、「学問としての普遍妥当性」に疑問を呈されている。やはり、岡本の主張の主軸は受け入れられていない。

また、当時、岡本は亀井勝一郎と『芸術新潮』誌上で、「伝統論争」と題した対談を行っている。「伝統序説」では、批判すべき「伝統主義者」の一人として亀井を檜玉に挙げている。そこでは、亀井の著書『大和古寺風物誌』に対して、「いわゆる美文であるにすぎず」、「伝統とは関係ない」などと痛烈に論難している⁽³³⁾。対談では、亀井が岡本に対し、次のようなことを述べている。

僕がたとえば「大和古寺風物誌」を書くときにだれが一番反発を感じたかという、和辻さんの「古寺巡礼」だ。僕がそこに見たのは一種の教養主義なのだ。（中略）むろん学問的背景は深いし、和辻さんを今でも尊敬しているけれど、僕が二十代の末に初めて大和をめづつたときに、最初に反発を感じたのが和辻さんだね。

和辻さんと僕とでは、世代が十数年以上違うでしょう。僕が大へんおもしろいと思つたのは、そういう反発を感じた僕に対して、今度は君が反発するわけだろう。そんなふうには、一口に伝統と言っても、時代や世代によつて互に反発したり抵抗を感じながら変化していくんだね。(中略)

僕から言わせると、つまりこういうことになるんだよ。これは伝統というものでなくて、一つの具体的なものなんだね。古い寺とか仏像を論ずる和辻さんのああいう態度は、一種の教養主義であると同時に、今あなたが言つたように日展風の古めかしさを感じないだろうが、今度は和辻さんの側からいうと、あれは和辻さんにとつての青春の書なんだな。あれ以前にはああいう表現はなかつた。お寺さんといえただけで、これを美として明確に見るとか、そういうことはあり得なかつた。和辻さんはやはり一個の先駆者なんだ。

ところが僕の場合になると、美の対象にだけして信仰の対象にしないことに不満であつた⁽³⁴⁾。

このように、亀井は自分が「伝統主義者」のつもりは毛頭なく、自身もその著書において岡本と同様に革新的に、「日本の伝統」や「古典」の既成の見方を否定し新しい見方を提示したのだと述べている。そして、それは和辻哲郎も同じはずだという。まるで、新しい世代の人が過去の人を否定し乗り越えていくのは、繰り返されて行く道理であるかのように、亀井は岡本が自分を批判することに対し納得している。これでは、「論争」になっていない。

以上のように、岡本の「伝統論」は、「伝統主義者」に対する痛烈な批判や「古典」に対する従来の見方の否定ばかりが特に着目され、支持されている。このことから、敗戦後10年を経て少し落ち着いたとはいえども、革新すべきという機運は依然として高いままであり、同時に、日本の過去のモノや「伝統」への関心が高まっている状況であつたのではないだろうか。

第1章で述べたように、岡本は当時「日本の伝統」とされているものを否定しながらも、つまり革新的でありながらも、戦後の社会において日本の過去や「伝統」をやはり価値あるものとして位置付ける論法を得ていた。これは、革新すべきという機運と、それに相反するともいえる日本の過去のモノや「伝統」への関心が、同時に高まっている状況に沿う理論であつたはずである。しかし実際に展開してみると、否定のみが目ざされ、「過去」によらず、「現在」の人々が自らの感覚で「伝統」を捉え、主体的に「新しい価値」、「新しい伝統」を創造しようという彼の主張の軸はあまり受け入れられなかつたのである。

それはなぜであろうか。本稿の冒頭で述べたように、岡本は復員後から、芸術をはじめとして様々な事柄に対し、革新的な発言を繰り返して、革新であろうとする当時の先駆的な存在として認識され、多くの人々に支持され、いわば追従されていたといえよう。岡本の「伝統論」も、『日本の伝統』がベストセラーになるなど、多くの人々に読まれた。それにもかかわらず、岡本が「伝統」について、既存の評価に頼らず、「現在」の人々が自らの感覚で主体的に「新しい伝統」を創造しようとする主張はあまり受け入れられていない。結局のところ、当時の人々は革新を求めていながらも、追従できる既存の評価を求めていたのではないか。自らが主体的に新たに創造するという考えは求められていなかったのではないだろうか。この点については、今後もさらに考察を続けていくこととしたい。

実は、このような反響に対し岡本自身が当時、疑問を感じているのである。

さぞかし伝統側から反論ごうごうとまき起るか、と楽しみにしていたのだが、いざ発表してみると、情けない限り。「いや、実は私も、前からそう思っていた」などと口を揃えて、ケロリとして讃辞を呈するのだ。

右に行っても左に行っても、ヒラリヒラリと鮮やかな身のさばきの巧さ。われながら大ナギナタを空振りしたような具合だが、いつでも、振ってみれば本質的にカッチリぶつかることのない、この国の文

化人達の性のなさである。

そんなことは構わない。今後とも手当たり次第、暴れてみるつもりである。本の売れ行き、真面目な読者からの膨大な手紙、また書評の数々に手応えを感じとった。私はこの方を通して将来にふくらみを期待するのである⁽³⁵⁾。

岡本は、「伝統主義者」から反論ではなく賛同されたことについて、想定と異なり落胆している。「振ってみれば本質的にカッチリぶつかることのない」と述べているが、当時の日本において何を「伝統」として捉えて行くのか、どのような「新しい伝統」を創造していくのか、岡本の主張の軸に対する本質的な議論にならなかったというのだ。

しかし、岡本はそのような齟齬を認識しながらも、「本の売れ行き、真面目な読者からの膨大な手紙、また書評の数々に手応え」を感じたという。自らの主張の軸を理解した人がいると前向きに捉え、その後も自らの前衛的な主張を貫いて行くのである。

おわりに

真に「前衛」であることにこだわる岡本は、「前衛」であることと矛盾しない「伝統論」を成立させ展開した。そこでは、「伝統」に対する既成概念や当時「日本の伝統」とされていたものを否定し、新たに捉え直すべきと主張することにより、「伝統」を真の「前衛」として取り組むべき課題となし得ている。また、既存の評価によらずに「現在」の人々が自らの感覚で主体的に「伝統」を捉えるべきと、前衛的な捉え方を提示することにより、自らの真の「前衛」としての立場を貫いている。さらには、過去のモノである「古典」を、その時代の前衛的なモノとし、それを克服することにより「新しい価値」を創造することができること論じ、「現在」においても価値のあるものとして位置付けた。

また、岡本は既に西洋の影響の下にある日本の「現在」の「現実」を認識し、日本と西洋の過去から「伝統」を主体的に捉え、「新しい伝統」を創造するべきと主張を行った。そのようにして創造しようとした「新しい伝統」の展望を明るく希望的なものとして、当時の社会に示している。

以上のような岡本の「伝統論」は発表当時、とても注目を集めた。それは、敗戦後10年を経て少し落ち着いたとはいえども以前高いままである革新すべきという機運と、それに相反するような日本の過去のモノや「伝統」への関心が同時に高まっている状況に沿う理論であったはずである。しかし、「伝統主義者」に対する痛烈な批判や「古典」に対する従来の見方の否定ばかりが注目され、その主張の軸である、「過去」によらず、「現在」の人々が自らの感覚で「伝統」を捉え、主体的に「新しい価値」、「新しい伝統」を創造しようという考えは、発表当初から受け入れられなかったのである。

『日本の伝統』に対する反響の大きさに「手応え」を感じつつ、その後も「現在」の感覚に訴えてくるものを、岡本は探し続けていく。そこでは、日本の過去からではなく、「現在」の日本の中にそれらを求めており、そこで出会ったモノについては、1958（昭和33）年の『日本再発見—藝術風土記』（新潮社）、1961（昭和36）年の『忘れられた日本〈沖縄文化論〉』（新潮社）、1964（昭和39）年の『神秘日本』（中央公論社）として発表している。それらについても、順次、検討を行い、岡本思想についてさらなる考察を深めたい。

註

史料は岡本に関連した新聞や雑誌記事のスクラップブックである『岡本太郎関連記事』（川崎市岡本太郎美術館所蔵）より主に引用している。

『岡本太郎関連記事』の冊子名は、便宜上、例えば『岡本太郎関連記事 1949 No.1』を『1949 No.1』と、「岡本太郎関連記事」を省略して「註」に記載する。

引用史料の記事の掲載年月日、紙名または誌名は『岡本太郎関連記事』に記載されているものを原則として採用している。

引用史料の漢字は新字体に直した部分がある。

- (1) 岡本は1942（昭和17）年1月に応召し軍に入隊した後、中国に渡っている。そして、1945年（昭和20）年8月、中国にて終戦を迎えた。その後、捕虜生活を送り、1946（昭和21）年6月に帰国した。その年の11月頃、世田谷の上野毛にアトリエ兼住居を構え活動を再開している。安藤孝裕・片岡香編「年譜」、『岡本太郎の絵画』川崎市岡本太郎美術館、2009年、218頁。
- (2) 岡本太郎「前衛画の地位」、『東京新聞』、1947年6月28日。（『1949 No.1』）
- (3) 岡本太郎「パリジェンヌとダンス」、『ダンス』、1947年11月。（『1949 No.1』）
- (4) 岡本太郎「フランス映画の良さに就て」、『スクリーン』、1948年10月。（『1949 No.1』）
- (5) 岡本太郎「巴里大学の思い出」、『有楽座プログラム』No.53、1949年12月10日～19日。（『1949 No.1』）
- (6) 岡本は1930（昭和5）年1月から1940（昭和15）年6月までパリに滞在している。自らが編んだ年譜の1939（昭和14）年のところに、「パリ大学、民族学科卒業」と記している。安藤孝裕・片岡香編「年譜」、『岡本太郎の絵画』川崎市岡本太郎美術館、2009年、217頁～218頁。岡本太郎・平野敏子編「岡本太郎年譜」、『岡本太郎著作集 第九巻』、講談社、1980年、429頁。
- (7) 拙稿「岡本太郎の「前衛」—『岡本太郎関連記事 1949 No.1』から—」（『米沢史学』第27号、米沢史学会、2011年10月。）
- (8) 岡本太郎「アヴァンギャルド美術について（上）」、『新大阪』、1948年3月28日。（『1949 No.1』）
- (9) 岡本太郎「光琳論（上）非情美の本質」、『三彩』、1950年3月。「光琳論（中）非情美を支えるもの」、『三彩』、1950年4月。「光琳論（下）芸術に於ける装飾性」、『三彩』、1950年5月。（『1950 No.1』）
- (10) 岡本太郎「四次元との対話 縄文土器論」、『みづゑ』、1952年2月。（『1952 No.1』）
- (11) 岡本太郎「連載 日本の伝統 庭園について」、『草月』、1955年3月。『いけばな草月』、1955年6月から1956年2月。（『1955 No.1』、『1955 No.2』、『1955 No.3』）
- (12) 「伝統論序説」は「伝統とは創造である」、「四次元との対話 縄文土器論」は「縄文土器—民族の生命力」、 「光琳論」は「光琳—非情の伝統」、「日本の伝統 庭園について」は「中世の庭—矛盾の技術」とタイトルをそれぞれ改められ再録された。その後、1964（昭和39）年5月に「伝統論の新しい展開」を加えて角川文庫より再刊行された。
- (13) 1956（昭和31）年9月8日の『大阪毎日新聞』掲載「週刊ベスト・セラーズ」では東京の3位、9月22日の『図書新聞』掲載「今週のベスト・セラーズ」では近藤書店（銀座）の3位、トッパン・セールズ（大阪）の4位、そして9月26日の『東京中日新聞』掲載「先週のベストテン」では丸善本店の2位と報じられている。（『1956 No.2』）
- (14) 「コジェーヴと同様、太郎もまた、戦後、1930年代フランスの思想的土壌のなかから『日本』を再発見することにはなった。それが、有名な『縄文土器論』を収めた『日本の伝統』であり、そのあとに続く『忘れられた日本』『日本再発見』『神秘日本』といった、一連の著作であった。」榎木野衣「縄文的なるものと日本的なるもの」、『黒い太陽と赤いカニ』、中央公論新社、2003年、97頁。

「前史としてのパリ体験なしには、戦後の、太郎による日本の再発見それ自体がありえなかったことは、もはや自明の了解とっていい。」赤坂憲雄「身をやつした民族学者」、『岡本太郎の見た日本』、岩波書店、2007年、95頁。

岡本太郎の「伝統論」に関する一考察

- (15) 「縄文の発見者は岡本太郎だということは、もう歴史として定着している。」岡本敏子「縄文の発見者」、『岡本太郎に乾杯』、新潮社、2002年、120頁。
「太郎が縄文の発見者であったことは、もはや広く知られるようになったといっていい。」赤坂憲雄「縄文からケルトへ」、『岡本太郎という思想』、講談社、2010年、192頁。
- (16) 榎木野衣は「それまでは、たんなる考古学的資料にすぎず、ひとつの独立した『文化』として語るための材料とは夢にも思われていなかった『縄文土器』を、太郎は、日本でもっともオリジナルな文化のかたちであり、まぎれもない芸術表現であると喝破した」とその意義を指摘している。また、赤坂憲雄は「縄文土器を縄文人の精神や世界観が宿されたモノとして認知したことこそが、太郎による縄文土器の発見の本義」とであると論じている。榎木野衣「縄文的なるものと日本的なるもの」、前掲註(14)、106頁。赤坂憲雄「身をやつした民族学者」、前掲註(14)、76頁。
- (17) 岡本太郎「伝統序説」、『中央公論』、1955年12月。(『1955 No.3』)
- (18) ～(25) 同上。
- (26) 岡本太郎「日本の伝統」、『岡本太郎著作集 第四巻』、講談社、1979年、179頁。
- (27) 前掲註(17)。
- (28) 岡本太郎「はじめに」、『日本の伝統』、光文社、1956年9月、49頁。
- (29) 「最近の傾向として各地から古都の古い美術品や神社仏閣の観光客が多くなった。それを反映して古美術の解説書、評論がたくさん出版され、教養ある観光客の教科書として役立っている。」埴野吉郎「『芥川風な点景』か＝ドライ派岡本太郎の発言＝」、『富山新聞』、1956年11月9日。(『1956 No.2』)
- (30) 「盲目的崇拜に痛打 岡本太郎著『日本の伝統』」、『東京中日新聞』、1956年9月11日。(『1956 No.2』)
- (31) 「伝統破壊者の見た伝統 岡本太郎著『日本の伝統』」、『サンデー毎日』、1956年9月30日。(『1956 No.2』)
- (32) 「容赦ない否定 画家の独特な美術論」、『産業経済新聞』、1956年9月27日。(『1956 No.2』)
- (33) 前掲註(17)。
- (34) (対談) 亀井勝一郎、岡本太郎「伝統論争」、『芸術新潮』、1956年11月。(『1956 No.2』)
- (35) 岡本太郎「自著をめぐって『日本の伝統』 伝統主義者の支柱を覆し我々自身の伝統を発見」、『読書新聞』、1957年4月1日。(『1956 No.2』)

付記

本稿は、2012(平成24)年9月23日、慶應義塾大学にて開催された近世近代研究交流会のワークショップで発表した内容に、大幅な補足を加えて成稿したものである。

本稿執筆に際しては、佐々木秀憲学芸員をはじめとして、川崎市岡本太郎美術館の皆様には多大なるご協力を賜った。心より深くお礼申し上げます。